書籍紹介

『Verzeichnis der deutschen Patentklassen Einteilung in Unterklassen und Gruppen(第2版)（ドイツ特許分類一覧 サブクラスとグループへの分類）』

Kaiserliches Patentamt（帝国特許庁）1910年発行

現行特許分類に受け継がれる ドイツ特許分類の"DNA"

特許庁に入庁して、最初に特許分類に触れたとき、膨大な項目を含む国際特許分類 IPC（7万項目）やFI（18万項目）が、一体何処でどのように生まれたのか素朴な疑問を抱いた。この疑問は、課室の書棚を整理している際に見つけたIPCハンドブックによって解消した。どうやら、現行のIPCは、ドイツ特許分類に基づいて作られたらしい[1)]。その後、IPCの元になったドイツ特許分類をこの目で見たいと思って過ごしていたが、アマゾンドイツのマーケットプレイスで出品されていた本書を運良く発見することができ、早速輸入することにした。価格は15ユーロ（約2000円）で、輸入代行手数料・送料含め、5000円程度で入手することができた。

本書は、1910年に発行された、当時の帝政ドイツの特許庁で作られた特許分類一覧である。1906年に第1版が発行され、4年後の1910年に第2版として本書が発行された。この分類は、The German Patent Classification（DPK）として、不思議なことに、スウェーデン特許登録庁では現在も使用可能である[2)]。

本書を読むことで、現行特許分類に脈々と受け継がれるドイツ特許分類のDNAを垣間見ることが出来る。

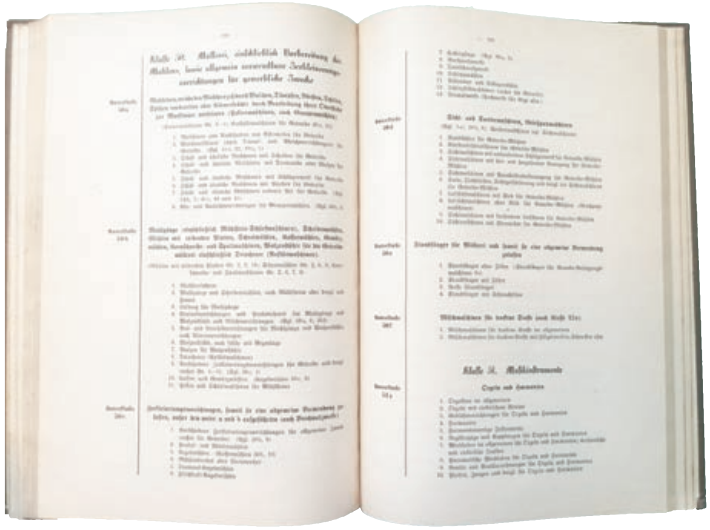
まず、階層構造は、クラスーサブクラスーグループの順に細分化されている。これは、現行のIPCの、セクションークラスーサブクラスーグループーサブグループの元になっている。ドイツ特許分類には、89のクラスがあり、その下に、約480のサブクラスと、最小分類単位として、約8000のグループがある。

なお、サブクラスを多く含むクラスの上位3つは、“化学製品”、“器械”（計算機など）、“漂白，洗浄，染色，捺染，壁紙印刷”であり、グループを多く含むクラスの上位5つは、“電気工学”、“鉄道操作”、“器械”（計算機など）、“農業”、“無軌道車”（自動車など）である。これらは、有機合成化学、アリザリンなどの合成染料、モータや発電機などの電気機器、内燃機関を搭載した自動車などで輸出を拡大した当時のドイツの産業構造を反映している。

また、細かく中身を見ると、例えば、第51クラスのMusikinstrumente（楽器）は、IPCのG10（楽器；音響）と階層構造が類似しており、第51クラスのサブクラスは、G10のサブクラスに、ほぼ1対1で

---

1) 財団法人日本特許情報センター発行　特許庁編“IPCハンドブック 国際特許分類のよりよき理解のために”昭和51年3月31日発行 p.6-7
2) https://www.prv.se/en/patents/online-services/the-german-patent-classification-dpk/



対応している。具体的には、51a オルガンとハーモニカ（G10B パイプオルガン，リードオルガン又は類似の送風機構と一体となった楽器）、51b ピアノ（G10C ピアノ，チェンバロ，小型ピアノまたは同様な弦楽器で1つまたはそれ以上の鍵盤のあるもの）、51c オーケストラ楽器（G10D 弦楽器；気鳴楽器；アコーディオン又はコンセルティーナ；打楽器；他に分類されない楽器）、51d 機械的音楽プレーヤ（G10F 自動楽器）、51e 音楽教習と補助具（G10G 音楽のための補助具；楽器の支持具；その他の音楽または楽器用の補助装置または付属品）に対応関係がある。考えてみると、過去100年間で楽器は劇的な変化をしておらず、ピアノやオーケストラは、現在も100年前と同じように人々の耳を楽しませ、感動を与えている。

一方、第42mサブクラスの計算デバイスの中の最小分類単位である第8グループ電気計算機は、1グループで、IPCにおけるサブクラスのG06F 電気的デジタルデータ処理の全てに対応していると思われるが、G06Fは、現在約350の項目を有する大きな分類となっている。これは、過去100年で電子計算技術が大きく発展したことを示している。また、第21クラスの電気工学は、IPCではHセクション（電気）に昇格し、所々類似点はあるものの、第21クラスとHセクションとは異なる階層構造を有している。

このように、過去100年間で、発展著しい分野（コンピュータ、電気）において分類は異なるものの、伝統的な分野（楽器）においては100年前に作られた分類が、殆どそのままの形で残っていることになる。そうであれば、我々が眼にしているいくつかの分類は、100年後の審査官も日常業務で用いているのであろうか。

100年前といえば、世界は、第1次世界大戦の最中である。当時と現在とを比べると、技術や産業、生活様式や国際情勢に隔世の感がある。当時作られたドイツ特許分類の“DNA”を、現在のIPCが、一部ではあるが、確実に受け継いでいることを考えるとき、特許審査業務が、深い歴史をもって、現在まで続いていることの重みが感じられる。普段の審査では忘れがちであるが、過去100年以上、幾多の先達が、工夫を重ねて生み出した様々な審査スキームの上に、現在の審査があることに感謝し、今後の審査を行っていきたい。そして、自分もその審査スキームの上に、何らの工夫を残して、将来の世代へ渡すことができれば幸いである。

本稿のドイツ語和訳は、同期の稲垣彰彦君に確認していただきました。ここに謝意を表します。

紹介者

調整課 審査システム企画班 審査システム企画第二係長

石川 雄太郎